

清兵衛と瓢箪・網走まで

志賀直哉



せい べ え ひょうたん あば しり
清兵衛と瓢箪・網走まで

新潮文庫

し - 1 - 4



昭和四十三年九月十五日 発行
平成八年十二月二十五日 五十四刷

著 者 志 賀 直 哉

発 行 者 佐 藤 隆 信

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二

東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一

電話 編集部(〇三)三二六六―五四四〇

読者係(〇三)三二六六―五一一一
振 替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Naokichi Shiga 1968 Printed in Japan

ISBN4-10-103004-9 C0193

新 潮 文 庫

清兵衛と瓢箪・網走まで

志 賀 直 哉 著



新 潮 社 版

1801

目次

菜の花と小娘	七
或る朝	一三
網走まで	二
ある一頁	三三
剃刀	六三
彼と六つ上の女	七五
濁った頭	八一
老人	一二五
襖	一三一
祖母の為に	一四三
母の死と新しい母	一五五

クロード・ディアスの日記	一六七
正義派	一八七
鵠沼行	一九七
清兵衛と瓢箪	二二一
出来事	二二九
范の犯罪	二三七
児を盗む話	二四三

解説 高田 穂

清兵衛と瓢箪・網走まで

菜の花と小娘

或る晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾っていました。

やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其処で自分の背負って来た荒い目籠に詰め始めました。

不図、小娘は誰かに自分が呼ばれたような気がしました。

「ええ？」小娘は思わずそう云って、起ってその辺を見廻しましたが、其処には誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰？」小娘はもう一度大きい声でこう云って見ましたが、やはり答える者はありませんでした。

小娘は二三度そんな気がして、初めて気がつく、それは雑草の中から只一本、僅に首を差し出している小さい菜の花でした。

小娘は頭に被っていた手で、顔の汗を拭きながら、

「お前、こんな所で、よく淋しくないのね」と云いました。

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答えました。

「そんなら何故来たのさ」小娘は叱りでもするような調子で云いました。菜の花は、

「雲雀の胸毛に着いて来た種が此処で零れたのよ。困るわ」と悲しげに答えました。そして、どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行って下さいと頼みました。

小娘は可哀相に思いました。小娘は菜の花の願いを叶えてやろうと考えました。そして静かにそれを根から抜いてやりました。そしてそれを手に持って、山路を村の方へと下って行きました。

路に添うて清い小さな流れが、水音をたてて流れていました。暫くすると、

「あなたの手は随分はてるのね」と菜の花は云いました。「あつい手で持たれると、首がだるくなって仕方がないわ、真直ぐにしていられなくなるわ」と云って、うなだれた首を小娘の歩調に合せ、力なく振っていました。

小娘は一寸当惑しました。

然し小娘には図らず、いい考が浮びました。小娘は身軽く路端に蹲んで、黙って菜の花の根を流れへ浸してやりました。

「まあ！」菜の花は生き返ったような元気な声を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するように、

「このまま流れて行くのよ」と云いました。

菜の花は不安そうに首を振りました。そして、

「先に流れて了うと恐いわ」と云いました。

「心配しなくてもいいのよ」そう云いながら、早くも小娘は流れの表面で、持っていた菜の花を離してしまいました。菜の花は、

「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらわれながら、見る見る小娘から遠くなるのを恐ろしそうに

叫びました。が、小娘は黙って両手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさえながら、駈けて来ます。菜の花は安心しました。そして、さも嬉しそうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

何処からともなく気軽な黄蝶きちようが飛んで来ました。そして、うるさく菜の花の上について飛んで来ました。菜の花はそれをも大変嬉しがりしました。然し黄蝶は性急せうかちで、移り気でしたから、何時いつか又何処かへ飛んで行ってしまいました。

菜の花は小娘の鼻の頭にポツポツと玉のような汗が浮び出しているのに気がつききました。

「今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配そうに云いました。が、小娘は却かえって不愛想に、「心配しなくてもいいのよ」と答えました。

菜の花は、叱られたのかと思って、黙ってしまいました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打っている髪の毛のような水草に根をからまれて、さも苦し気に首を振っていました。

「まあ、少しそうしてお休み」小娘は息をはずませながら、そう云って傍かたわらの石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、気持が悪いわ」菜の花は尚しきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」小娘は云いました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。ど

うか」と菜の花は頼みましたが、小娘は、

「いいのよ」と笑って取り合いません。

が、その内水の勢で菜の花の根は自然に水草から、すり抜けて行きました。そして不意に、
「流れるう！」と大きな声をして菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それを追って駈け出しました。

少し来た所で、

「やはりあなたが苦しいわ」と菜の花はコワゴワ云いました。

「何でもないのでよ」と小娘も優しく答えて、そうして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駈けて行く事にしました。

麓の村が見えて来ました。小娘は、

「もう直ぐよ」と声を掛けました。

「そう」と、後で菜の花が答えました。

暫く話は絶えました。只流れの音に混って、パタパタ、パタパタ、と小娘の草履で走る登音が聴えていました。

チャポーンと云う水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にそんな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立ち止まりました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたようになって、

「早く早く」と延び上っています。小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱くようにして、後の流れを見廻しました。

「あなたの足元から何か飛び込んだの」と菜の花は動悸どうきがするので、言葉を切りました。「いほ蛙がえるなのよ。一度もぐって不意に私の顔の前に浮び上ったのよ。口の尖とがった意地の悪そうな、あの河童かっぱのような顔に、もう少しで、私は頬っぺたをぶつけるところでしたわ」と云いました。

小娘は大きな声をして笑いしました。

「笑い事じゃあ、ないわ」と菜の花はうらめしそうに云いました。「でも、私が思わず大きな声をしたら、今度は蛙の方で吃驚びっくりして、あわててもぐって了いましたわ」こう云って菜の花も笑いしました。

間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の菜畑うちと一緒にそれを植えてやりました。

其処は山の雑草の中とは異ちがって土がよく肥えておりました。

菜の花はどんどん延び育ちました。

そうして、今は多勢の仲間と仲よく、仕合せに暮す身となりました。

或

る

朝

祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寢床で小説を読んでいると、並んで寝ている祖母が、

「明日坊さんのおいでなさるのは八時半ですぞ」と云った。

暫くした。すると眠っていると思った祖母が又同じ事を云った。彼は今度は返事をしなかった。

「それまでにすっかり支度をして置くのだから、今晚はもうねたらいいでしよう」

「わかってます」

間もなく祖母は眠ってしまった。

どれだけか経った。信太郎も眠くなった。時計を見た。一時過ぎていた。彼はランプを消して、寝返りをして、そして夜着の襟に顔を埋めた。

翌朝（明治四十一年正月十三日）信太郎は祖母の声で眼を覚した。

「六時過ぎましたぞ」驚かすまいと耳のわきで静かに云っている。

「今起きます」と彼は答えた。

「直ぐですぞ」そう云って祖母は部屋を出て行った。彼は帰るように又眠ってしまった。

又、祖母の声で眼が覚めた。

「直ぐ起きます」彼は気安めに、唸りながら夜着から二の腕まで出して、のびをして見せた。

「このお写真にもお供えするのだから直ぐ起きておくれ」

お写真と云うのはその部屋の床の間に掛けてある擦筆画さつびがの肖像で、信太郎が中学の頃習った画学の教師に祖父の亡くなった時、描かいて貰ったものである。

黙っている彼を「さあ、直ぐ」と祖母は促した。

「大丈夫、直ぐ起きます。——彼方むこうへ行つて下さい。直ぐ起きるから」そう云って彼は今にも起きそうな様子をして見せた。

祖母は再び出て行った。彼は又眠りに沈んで行った。

「さあさあ。どうしたんだっさ」今度は角かどのある声だ。信太郎は折角沈んで行く、未だまその底に達しないところを急に呼び返される不愉快から腹を立てた。

「起きると云えば起きますよ」今度は彼も度胸を据えて起きると云う様子もしなかった。

「本当に早くしておくれ。もうお膳ぜんも皆出てますぞ」

「わきへ来てそうぐずぐず云うから、尚なお起きられなくなるんだ」

「あまのじゃく！」祖母は怒って出て行った。信太郎ももう眠くはなくなった。起きてもいいのだが余り起きろ起きろと云われたので実際起きにくくなっていた。彼はボンヤリと床の間の肖像を見ながら、それでももう起しに来るか来るかという不安を感じていた。起きてやろうかなと思う。然しもう少しと思う。もう少しこうしていて起しに来なかったら、それに免じて起きてやろう、そう思っている。彼は大きな眼を開あいて未だ横になっていた。

いつも彼に負けない寝坊の信三が、今日は早起きをして、隣の部屋で妹の芳子と騒いでいる。